

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

-----  
AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究(2)－マイクロとマクロの視点から」

2023 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目） 日時：2023 年 7 月 8 日（土）14:00–18:30

場所：AA 研 306

概要：2023 年 7 月 8 日（土）に第一回の研究会を実施した。代表の富沢寿勇静岡県立大学 教授と副代表である AA 研の床呂所員による趣旨説明に続いて、下記のように協力者の新井和広氏（慶應義塾大学）による報告と参加者全員による質疑応答を実施した。報告の概要はそれぞれ下記の通りである。

報告タイトル：現代インドネシアにおける系譜の意味：ハビーブの系譜の信憑性をめぐる 2023 年の議論から

報告者：新井和広（慶應義塾大学）

要旨：本報告ではインドネシアにおける預言者一族の系譜の信憑性をめぐる最新の議論を紹介し、現時点で論争の背景に何があるのかを考察した。2022 年 10 月にタンゲランのアーリム、イマードウッディーン・ウスマーン・バンターニーがインターネット上で公開した著書は、ハドラマウト起源の預言者一族（ハドラミー・サイイド／ハビーブ／アラウィー）の血統の記録が過去数百年間にわたって途絶えており、学問的には預言者の子孫とは言えないと結論づけた。それに対してサイイド側からさまざまな反論が寄せられ、さらにイマードウッディーンも反論の書を公開する形で報告時点（2023 年 7 月）まで熱の入った論争が続いている。サイイドの側からの反論は伝統的な系譜学（ナサブ学）や文献学に沿ったものだが、現存している文献の状況を考えると彼らの系譜の信憑性を補強する決定的な証拠を出すことは難しいと考えられる。ジャワの有名な聖者であるワリ・ソングの系譜もハドラミー・サイイドにつながるとする説があるが、ワリ・ソングの子孫の中には今回の件を受けてハドラミー・サイイドとのつながりを否定する（つまり別の系統の預言者一族であるとする）見解も出てきている。

インドネシアにおいて預言者一族を名乗る人びとの系譜に疑問が呈されるのは今回が初めてではない。20 世紀前半、特に 1930 年代には同じくハドラミー・サイイドに対してさまざまな批判が寄せられたが、その際に系譜の信憑性が問題視されたこともあった。しかし今

回の論争は以下の点で90年前の論争とは異なっている：1. 歴史学、文献学などの学問的な議論をベースにしている、2. DNA 検査が提案されるなど現代の科学に基づいた検証も提案されている、3. 議論されているのはサイドの血統の信憑性だけであり、サイドの社会的地位をめぐる他の論争は見られない、4. 前回の論争が主にアラブ（ハドラーミー）・コミュニティ内で行われていたのに対し、今回は非アラブのインドネシア人が当事者となっている、5. 預言者の血統は尊いのかという根本的な議論はほとんどなされていない。また今回の論争の舞台はソーシャルメディア、特に Youtube であり、公開された動画の中には50万再生を超えるものもある。その一方名の通ったマスコミや NU をはじめとする宗教団体のサイトは今回の件を積極的に取り上げていないようである。

それでは今回の論争に特別な背景はあるのだろうか。ハドラーミー・サイドのうち宗教者は「ハビーブ（愛される者）」と呼ばれ、種々の宗教行事、イスラーム勉強会、預言者生誕祭や聖者祭の開催を通じて「ファン」を増やしてきた。その一方彼らの一部がとる尊大な態度などが原因で批判を浴びてきたことも確かである。今回の論争はインドネシアの人びとの中にあつた反サイド、または反アラブ的な見解が一人の宗教者の議論をきっかけにたまたま表面化したと理解することも可能である。しかし論争が起こった時期を見ると2024年の大統領選との関連も否定しきれない。過去においても大統領候補が選挙前にサイドの墓を訪れたことが報道されており、彼らとの関係が選挙に有利に働くと認識している人びとがいるのは確かである。また報告者が紹介した「反アラブ」的なツイッター・アカウント（フォロワー数から見て大した影響力はないと考えられるが）については、大統領選の有力候補であるプラボウォ・スビアントと関連している可能性があるという研究会参加者から指摘された。いずれにしても論争がどう決着するのか、また実際に政治的な背景があるのかどうかが明らかになるまでにはまだ時間がかかるだろう。

（以上終わり）